

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2024年 7月 12日	
所属部局・学年	野生動物研究センター 保全福祉科学分科 M1
氏名	中村陽月

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
幸島、都井岬
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・行動生態野外実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2024年5月7日 ~ 2024年5月13日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
幸島観察所、杉浦准教授、鈴木技術補佐員
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習では、野外において野生動物の行動を観察する手法や、フィールドワークの基礎的な技術などを学んだ。幸島での3日間の野外観察を行ない、ニホンザルの行動を観察した後、得られた観察結果について発表を行なった。また都井岬を訪問し、野生馬の観察も行なった。スケジュールは以下の通りである。
5/7：幸島観察所に到着・観察の準備 5/8：幸島へ渡航・ニホンザルの観察・山歩き 5/9：ニホンザルの観察・浜辺で生物観察 5/10：ニホンザルの観察・幸島観察所へ帰還 5/11：都井岬訪問 5/12：発表準備・発表 5/13：幸島観察所出発・青島訪問
幸島 幸島では主にニホンザルの観察を、3日かけて行なった。朝8時過ぎ頃に砂浜にニホンザルの餌である穀物が散布されると多くのニホンザルが砂浜に集まってくるので、その際に観察を行なった。今回の観察では、各自1つテーマを決めて観察した。私は「ニホンザルと他の生物の相互作用の解明」というテーマを採用した。具体的には、私が所持していたオニヤンマの模型をニホンザルに提示したとき、彼らがどのような反応を示すかということを観察した。このとき、ニホンザルはその模型を餌として認識するのかということや、若齢個体はその模型で遊びを行なうのかということが私の興味であった。ほとんどの個体はオニヤンマ模型に対して無反応、または忌避反応を示したが、一部模型に対して興味を示した個体もいた。その中で、「ツカサ」と名付けられた4歳の個体は、模型に対する興味が特に強く、何度も奪い取ろうとしてきた。また、「ツツジ」と名付けられた妊娠中の個体も、模型を奪い取ろうと手を伸ばしてきたことがあった。さらに、対照実験として緑色のスケッチブックを見せたとき、「ビネガ」という名の個体は他の個体と比較して異常なまでの忌避反応を見せた。本来ならばこれらの反応のその先、つまり模型をどう扱うのかということを知ることが私の興味であったが、今回は模型を奪われることは避けなければならなかったため、今回の私の観察ではこのような反応を記録するのみに終わってしまった。真に私の知的好奇心を満たすためには、本物の虫を用意してそれを提示すべきであったが、私は虫の捕獲に関して不得手であるため、実際の虫を利用することは不可能であった。また、今回模型に反応した個体が少なかったのは、観察者である私に対して反応する個体がほとんどであったためであると考えられる。以上より、ニホンザルとの距離を適切に保ち、本物の虫を使用して観察を行えば、より科学的に意味のあるデータが得られると考えられる。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



オニヤンマの模型



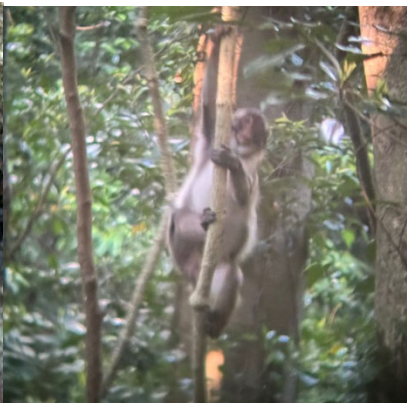
ニホンザルのツカサ

また、幸島では基本的なフィールドワークの手法についても学習した。具体的には、GPS とコンパス、地図を用いて自身の位置を知り、山林内をトレッキングするというものである。普段山を歩くときは整備された登山道を歩くが、今回の実習で歩いた山には道などはなく、自分の進むべき方向を定めて、下草が繁茂した道なき道を分け入りながら歩いた。このような技術は実際に山岳で遭難したときに非常に有用であり、自分がフィールドに出るときは是非参考にしようと思う。また、山歩きの最中に何頭かのニホンザルを目撃した。藪や枝に隠れて見つけづらかったものの、普段からのバードウォッチングの経験を活かしてそれなりに多くの個体を見つけることができた。

空いている時間、私はひたすら浜辺で生物を観察していた。謎のイソギンチャクや、タマシキゴカイの卵塊と思われる物体など、普段馴染みのない生物をたくさん発見した。また、この時期は日本に夏鳥が渡ってくる時期であり、オオルリやキビタキ、ヤブサメの声を頻繁に聞いた。また、杉浦氏は早朝アカショウビンの囀りを聞かれたそうだ。



謎のイソギンチャク？



森で見つけたニホンザル

都井岬

都井岬では野生馬の観察を行なった。都井岬の馬は個体識別番号が刻印されているため、容易に識別することができた。生まれたばかりの仔馬、金色に近い毛並みを持つ馬、下痢の馬など、多種多様な個体が観察できた。幸島のニホンザルとは異なり、人間に対する警戒心並びに好奇心が薄く、無関心であるように思えた。普段から観光客などの多くの人間を目にしているからであると考えられる。そのため、観察は比較的容易に行なうことができた。しかし、私は馬間の相互作用が確認できることを期待して観察を行なったが、相互グルーミングなどは観察できなかった。基本的に、馬たちは草を喰んでいるか、風に吹かれて呆然と立ち尽くしているのみであった。稀に身を寄せ合う個体も見られたが、相互グルーミングが起こる瞬間は確認できなかった。都井岬ではドローンの操作も体験させていただいた。ドローンの操作は初めてで難しかったが、カメラを見ることで上空から馬の群れを見渡せるので、馬の群れを大局的に観察する際には非常に便利であると感じた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



横たわる仔馬

まとめ

今回の実習は野生動物を観察する際の心構えや、フィールドにおける作法などを学ぶことができた非常に良い機会であった。また、フィールドワークの方法だけでなく、同期のメンバーとの共同生活を通して親交を深めることができた大変良い実習であった。

6. その他 (特記事項など)

今回の実習でお世話になった杉浦氏、鈴木氏、並びに幸島観察所の皆様には心より感謝いたします。